日々の暮らしと自然

江木 剛吉 *Written by koukichi Egi*

はじめに

生物多様性条約締約国会議（ＣＯＰ10）が10月に名古屋市で開催される。昨年、国連気候変動枠組み条約締約国会議（ＣＯＰ15）がコペンハーゲンで終わったばかりで、私は近年、この種の会議はなかなか成果が得られないものだと思いこんでしまっている。

しかし、地球の温暖化については毎年繰り返される各国の駆け引きばかりが目に付くが、新しい産業や暮らしのエネルギー利用のあり方が提示されるようになってきた。もっとも、先進国に住む私たちにとって暮らしの中で、できる得ることは限られているように思える。たとえば、省エネ家電に買い換えたりすること、また、エネルギーの無駄遣いをできるだけ避ける暮らし方にシフトすることぐらいであり、考えさせられることの多さと、できることの少なさに愕然とさせられる。

一方で、生物多様性条約については、どのように対応すればよいのか判然としない。

ただ、庭での休息や、朝夕の愛犬との散歩中に出会う野鳥や昆虫など、植物の芽吹きや香りを身近に感じることができる限りは自然との会話はできると思われる。

また、このような四季の変化と温度や湿度、風の強さや風向の変化を感じられることも、もっとも大切だと思われる。

ツルバラとはえにえ

我が家には、なかなかうまく咲かないツルバラがある。このツルに時折「はえにえ」が見られる。昨年は、モズにトカゲの子供がイケニエのように、はえにえとされていたのである。

何故イケニエのようにと感じたのかは、多分、トカゲとの距離感である。毎年、我が家の庭に小さな卵から生まれ、縁側を這いずり回り、今は社会人となった子供たちが幼児期に、手のひらに乗せて遊んでいた生物は、家族のように感じられたからである。そうはいうものの、晩秋にモズの高啼きを聞くといつも通り戻ってきたと安心する。何となく、なま暖かい秋も終わり、冬を告げる一啼きである。

蝶の羽化とレモン

我が家のレモンの木は、植えてから5～6年経つが大きく成長しない。もう実がなることさえ諦めている。毎年、春の芽吹きからしばらくすると小さなビーズの玉のような卵がたくさん産み付けられるのである。アゲハチョウの卵である。しばらくすると葉はなくなり、幼虫がたくさん枝にからみついている。これが、秋近くまで続く。ということで、我が家のレモンの木は、人間が食するためには育っていないのである。

ゆっくりと羽を伸ばすアゲハチョウ

この幼虫がいつの間にか、蛹になり羽化が始まる。去年は、レモンの木の近くのユキヤナギの枝にぶら下がり羽化が始まり、蝶が飛び立っていった。この木の間は、ほぼ1m程度であるが、移動している間に野鳥についばまれなかったと、感心して見ていた記憶がある。近くの家々の柑橘類にはこのような食されかたはないので、このレモンの木の位置が蝶の通り道として、よほど都合がよいようだ。実付きは諦めているので、このような羽化の瞬間が来年、またその次の年と、見学できる環境をこの小さな庭が維持できればと思う。

カラスの狩り

生ゴミを出す日は早朝、寝床でカラスの声が聞こえてきて分かるぐらいである。しかし、随分前から自治会でゴミネットをするので、電柱から見下ろしているカラスたちは、分け前をいただくことができなくなっている。それでも、やってくるのである。

昨年の5月頃、近くの家の屋根で何かをつつく音が聞こえたので、その方向を見るとどうやらカラスが小さな野鳥をついばんでいるようであった。この家の屋根は、陸屋根で平坦な屋根なので、カラスは料理がしやすい環境を選んでいたのかもしれない。どちらにしても、ゴミあさりでなく狩りをしていたのである。近くでは、ゴミネットをする地域がほとんどとなり、カラスには厳しい環境であるが、本来の姿であり、数も減ると思える。夕方になると、集団で北の林へ向かう姿が見られるので、ねぐらはまだ安心なのかもしれない。

鹿とコウノトリ

昨年5月、仕事でダム周辺環境整備の一環で貴重種と呼ばれる植物の移植環境として池と湿地を整備したが、これを見るつもりで出かけた。

ついでに、出石の町に立ち寄り、コウノトリ公園まで足をのばすことにした。

まず、ダムに着くといきなりバスフィッシングの若者たちの多さに驚き、片田舎のこんな小さな水源ダムにバスを放して楽しんでいる姿に愕然とした。そして、造成された小さな池の様子を見て、ダム周辺の道路に目を向けると雌鹿が横たわって死んでいたのである。明らかに交通事故である。

この鹿はダムができる以前と同じように、暮らしのテリトリーを歩いていたと思われる。

何かを自然の中につくり、環境の変化をもたらすことに、考えさせられる結果を突きつけられたようなシーンであった。この池に鹿の足跡が残っており、きっと水を飲んだのだと思われる。

しばらくして、出石の町歩きに出かけ、初代東大総長の加藤弘之氏の生誕の家に立ち寄ってみた。ここで、もっとも驚いたのが、小机の上に飾ってあった小さな写真立てであった。ここに写っていたのは、直立したコウノトリとこの家の家族である。つい100年前頃、人とこんなに近くに暮らしていたのだ。

管理人の方によると、たくさんいたので食べ物がないときには、コウノトリといえども食料

貴重な植物を集めて保全するビオトープ

公園の柵近くの木々に休むコウノトリの群れ

になったらしいとのこと。

私はこの言葉にも驚いたが、写真を見つめているとまんざら嘘ではないと思えてきたのが不思議だった。

その後、コウノトリ公園を2年ぶりに訪問して、たくさんの見学者とオープンゲージのコウノトリを見ていると、加藤邸の写真との落差が大きく、自然に帰すプログラムを持つ公園が動物園に思えたくらいである。

帰りは車上から円山川を見ながら、かつて、この川を太い軸にして広範囲にたくさんのコウノトリが生育していたのを想像して、この地形や水系があり、米づくりをベースにした人の営みがある限り、コウノトリの復活は想像ではなく紛れもない事実になるだろうと思えた。

友人の目

昨年末、東京の友人から届いた一文に身近な環境変化に気づいたことが書かれてあった。それは、明らかにプロの目で見た現象であった。それは、ヤマトシジミという散歩道や庭で見られる蝶と食草であるカタバミという雑草の関係の変化である。

その変化は、彼の庭でよく見られていたヤマトシジミが1年前から姿を消したことから始まった。調べていくと、庭のカタバミがいつの間にか北米産の帰化植物であるオッタチカタバミという種に置き換わっていたとのことであった。彼はその後、ヤマトシジミがこの帰化植物に吸蜜に訪れ、葉裏にはたくさんの卵が産み付けられていたことを確認している。その理由はまだ分からないが、ヤマトシジミはこの変化を生き延びるであろうと締めくくられていた。

このような目を持つ彼は、昆虫の専門家であり昆虫と植物をはじめとする環境を見てきたから、変化に気づき、周辺環境を含めた考察もできるのである。ただ、ヤマトシジミがいなくなったという「気づき」が大切で、暮らしの中で出会う自然とうまく付き合っていれば、私たちも「変だし…どうして？」と次へ進むことができる。やはり、「気づき」という最初の動機は、もっとも大事にしたいものだと思う。

NEXT21の緑地管理

私が緑地設計者としてかかわった大阪ガスの実験集合住宅NEXT21の緑地の管理は、居住者と専門業者のそれぞれに区分されている。居住者は、低木を対象とした管理を引き受けており、主として低木剪定である。

私は、この低木剪定の管理をサポートする立場である。ここで、生物の多様性について考えさせられた2点を整理する。

第1は、剪定時期のことである。植物は、花芽をつみ取らないことで来年に花が咲くということで、その時期が限られている。これは、剪定が単に美しく切りそろえるためだけでないということで、吸蜜行動をとる蝶や野鳥などの基本的環境要素を整えることを知る重要な動機でもある。

第2は、チャドクガとツバキやサザンカの関係。古くて新しい「害虫と植物」問題である。この害虫退治として、もっとも極端な意見は、樹木の「伐採」である。原因の根を絶つ方法としては、もっともな意見である。

しかし、この2種の植物が冬の野鳥が吸蜜できる環境を提供していることを知ることで、別の方法を採用するに至った。

結果として、チャドクガのいる枝や葉だけの除去や部分的な薬剤散布による対処が選択されるようになった。

このように、低木だけの剪定管理であっても、暮らしの中で見かける野鳥や蝶などの生育環

低木の剪定を行うNEXT21の居住者

境を支えていることに思いが至ることが大事なことだと思える。

生物界と曼陀羅図像

柿の実る季節、高野山に寺院や周辺の自然を見に出掛けた。多宝塔の立体曼陀羅の構図を眺めながら平面的な曼陀羅図像を思い浮かべていた。

この一文を書き始めたとき、生物多様性条約と日々の暮らしがつながらないもどかしさがあり、パソコンの前でフリーズしてしまったままで困っていた。年末、高野山の多宝塔の写真を見ていたとき、曼陀羅図像と生物が重なるイメージが浮かんだ。

古くから雑木の丘と集落を結んでいた切通しの坂道からの眺望

自然界がたくさんの生物種で満たされ、それぞれの種が図像の一部をつくる世界を構成していれば、無限に近い図像が描かれる。そして、気が付かないところで種が滅びるたびに小さな図像が曼陀羅から抜け落ちていく、そのようなイメージである。

何かの小さな図像であっても、これを失うことがきっかけで、全体の図像が成り立たなくなることがもっとも避けなければならない事態である。

日々の暮らしの中で、コウノトリだけでなく、モズやカラス、アゲハチョウ、トカゲなども小さな生物界をつくり、それぞれが図像の1つである。その図像を支える様々な環境や関連する生物たちをイメージして、具体的に付き合える暮らし方を実践したいものだ。

散歩中の夢想

我が家は、奈良市西部の丘陵地にある。今は社会人1年生の娘が2歳の時に引っ越してきたから、もう、20年を越している。

ここに決めたのは、この自然の恵みの中で暮らしたいと思ったからである。我が家からおよそ300m程度歩くと坂に着く、これを下ると田圃が続く、その向こうには矢田丘陵の子供の森があり1時間程度歩けば到着する。

子供たちとの思い出も、ほとんどがトンボや蝶の採集、ザリガニ釣り、そして、スズメバチに警戒されたり米の花の観察でちょっと失敬したりと、たくさんある。

今は愛犬と散歩しつつ、野鳥を見たりして季節だけでなく、気象の変化にも気づかされる。つい最近、滅多に見られないアオジを近くの庭で見つけて、寒波の影響でここまで越冬のためにやってきたのかと、勘違いかもしれないが、驚いたりしている。休耕田のヨシや枯れ草の穂先には、オオヨシキリがうるさく啼いている。モズは見晴らしのよい笹の先端で、遠くを見つめている。

これから春を迎え、草の芽が生えはじめると目の前に一気に生物が増える。

この多くの生物を一本ずつの横糸とすると、数え切れない糸があり、環境を縦糸とするとこれも数え切れない糸となる。

そして、無数の横糸と縦糸が織られて、多様で多彩な模様の「自然」という織物を目の前で見ることができる。このように考えると、横の糸も縦の糸も少しずつ変質して、消滅することになると「自然」はすり切れ細くなり、鮮やかな色は失われることが容易に想像できる。それは、環境の変化が横と縦の結び目を壊す働きをした場合、そのダメージは大きい。私の散歩の中で、長年変わらなく会えた多くの生物や風景がなくなるのである。

これらは散歩の途中の夢想であるが、気象変動のCOP、生物多様性のCOPは別々の会議ではあるが、基本に流れる思いや理念は同じなのだと思い至った。

遠い将来、都市近郊の住宅地や自然の中で、出会う生物群が全く異なるような、少なくなるような、そんな事態だけは想像したくないものである。CEL

◎江木 剛吉（えぎ・こうきち）
アトリエE2代表、NEXT21緑地設計。